

2007年度茨城県平和委員会定期大会近づく

07年総会が終わりました

第5回常任理事会報告

県大会を前にした常任理事会が水戸で開催されました(14名)。今回の常任理事会は5月27日の理事会で作成する県大会議案(運動方針・予算・役員など)の骨子を検討することでした。要点のみ報告します。

運動の基本をどこにおくか

安倍内閣が憲法改正を政治日程に掲げたことで国民との全面対決が本格化し、改憲阻止には県民の理解と運動が鍵となります。共同行動を重視し、県民への宣伝行動の倍加をめざします。そのために平和委員会の組織的強化を図ります。

平和をめぐる情勢と私たちの運動(略)

運動の課題と方針

1. 仲間づくりと組織活動の改善
2. 改憲阻止に向けて
3. 米軍機くるなの取り組み
4. 核兵器廃絶の運動
5. 事務局体制の強化

以上のような骨子で以下のような話し合いが行われました。

- ・改憲・戦争参加への不安と関心が国民の中に高まってきている。平和委員会が仲間にどう迎え入れるかが問題。そのために知恵を出し合える会議の工夫が大切。「会議をもつこと」から「会議の充実」が問われている。
- ・地域ニュース・チラシなどで地域の人々との接触を重視。
- ・仲間づくりは自主性に依拠しつつも、短期間でもお互いの励まし合える統一した取り組みがほしい。
- ・8/6~15を「平和旬間」とし各種のつどい等を行った方がよい。
- ・平和委員会の内部で「9条の会」関係者の話し合いをもつべきだ。
- ・「憲法改憲反対茨城共同センター」を他団体と話し合っ作る努力をして行くべきだ。
- ・10万筆目標「米軍機くるなの」署名は無理があり決める時に問題があった。

- ・核兵器廃絶運動では平和行進や世界大会に各平和委員会も努力しているがさらに頑張らなければならない。
- ・米軍機くるなど安保で「10・21県民集会」を開催すべきだ。
- ・県大会も5・3憲法集会を考慮すると6月に延ばしたらどうか。
- ・平和委員会を理解してもらうためにも常任理事・理事を増やした方がいい。
- ・ブロック会議とそのための援助金30万円が使われなかったがブロック会議は引き続き成功させたい。援助金は申し出をうけ検討したい。

県大会までの仲間づくりの検討が充分できなかったので、理事会で深く話し合います。以上

各平和委員会(平和の会)各位

県大会を成功させるために諸会議を開催してください

大会代議員の選出及び理事の推薦をお願いします

県大会に向けて仲間づくりに奮闘してください。

当面の取り組みを強めて、県大会を成功させよう。

その他

米軍機は来るな！食糧と農業と平和を考える

出会いのイベント

第14回 いざ、田植え

日時	- 5月27日(日) 10時受付 雨天決行!	
場所	- 百里平和農園(東茨城郡小川町)	
費用	- 年齢×100円(上限1000円)	
用意する物	- 田植えの出来る服装と My 食器	
その他	- 沢山のイベントを用意しております。	

07年土浦平和の会総会は5月13日(日) 四中地区公民館で行なわれ、06年度経過報告、会計報告、07年運動方針を承認し、新役員を選出し無事終了しました。

会は最初「土浦平和の会の12年」アルバムをテレビで見た後、小笠原徹さんの「30年代の民主的市民運動」についてのお話を聞きました。

土浦では1952年(S27年)平和憲法擁護連盟(仮称)を結成し、ピキニ水爆実験に反対するアピールを発表し、第1回原水禁世界大会に代表を送ったこと。文化団体連絡協を結成して市公会堂建設促進準備会を結成して市民会館建設を請願したり、市に折りたたみ椅子を購入してもらって貸し出させたり、日中友好協会土浦支部から第1次茨城県民訪中団に代表を送ったり、勤労者音楽協会を結成して外山滋のバイオリンリサイタルを開いたことなど。平和運動と文化運動は一体のものとして取り組んできた歴史を話していただきました。

小笠原徹さんはその間土浦市議会議員に当選、県議員に立候補され、県歯科医師会副会長も勤められた大変活動的な歯科医さんです。



(土浦平和の会ニュース 182号より転載)

平和かわら版

472
月3回発行
2007.5.25

平和新聞茨城版

発行：茨城県平和委員会
〒310-0912 水戸市見川5-127-281

Tel/Fax 029-251-2806
E-mail ibahei@amber.plala.or.jp



「アウシュビッツは本当に終わったのだろうか」

さくらのまち日立平和の会 古川 義徳

5月20日～21日にかけて大宮平和の会・美和緒川平和の会・新婦人大宮支部等が取り組んだ、アウシュビッツ平和博物館見学会に参加した。約40人の参加で楽しく有意義な2日間となった。博物館を見学して強く印象に残ったのは、「アウシュビッツの子どもたち」（青木進々著・グリーンピース出版会）から抜粋したという文章だった。薄暗い館内の板壁に本のコピーのような形で紹介されていた。

1945年5月、ナチスドイツは滅びた。

いま…アウシュビッツには親をさがす子どもたちの泣き声も、子をさがしてドイツ兵とどなりあう親の声もない。収容所のあとはそのまま残され、博物館になっている。ドイツは、ナチスのしたことを人道に対する犯罪だったと認めて、いまでもつくないをつづけている。

でも、アウシュビッツはほんとうに終わったのだろうか？

ヒトラーは死んだ。ナチス・ドイツも滅びた。でも、ヒトラーを尊敬する人はいまでもいる。かれらは「ネオ・ナチ」とよばれ、その数はふえつづけている。なぜだろう…

いま、私たちの心の中に、「優秀な人間」と「だめな人間」とを分けようとする考えがないだろうか？

みんなと同じことをできない人を「だめなやつ」だと決めてしまうことはないだろうか？

みんなとちがう意見をいう人を「じゃまなやつ」だといって、仲間はずれにすることはないだろうか？

強い者にきらわれたくなくて、いけないことが分かっているのに、やってしまうことはないだろうか？自分さえ得すれば、「他の人なんかどうでもいい」と、思うことはないだろうか？ あの時のように…

アウシュビッツは、狂った人びとが、まちがえて作ったものではなかった。

ドイツ人がどうかしていたのでもなかった。ただ、自分が困った時に、もっと困っている人びとを思いやれなかった。自分さえ安全なら、ほかの人がすこしくらい苦しんでも、すこしくら



アウシュビッツ平和博物館

父の戦争体験聞き取り (その1)

茨城県西農民センター 久保 幸子

父の母親は父が2歳の頃病気で亡くなりました。

父親は父が20歳を迎えるまでは生きていました。

父の兄弟は姉 長女と次女は（時計工場で働いていたが20代前半で亡くなる）・三女 兄 長男（南京へ行き終戦後病気で亡くなる）・次男と三男は（父が生まれる前、幼児の頃亡くなる）・四男・父 五男（父は8人兄弟の末っ子です）

父は昭和10年生まれの子。今年72歳になります。

生まれ育った所は東京都東村山市秋津町。埼玉所沢市との境目にあたる農村地帯で都心とは離れています。2歳の時に母親が亡くなったため、年の離れた兄と姉が面倒を見てくれていました。

昭和19年、父が小学校4年生の頃、B29による東京への空爆がまりました。東村山は何もない田舎であったために爆撃は免れましたが、それでも空襲警報のサイレンの音やB29が飛び交う光景は恐ろしかったと言います。

ある日、自宅の斜向かいの土地にB29が落ち、残骸は何ヶ月も放置されていた。放置されたと言うよりは、皆自分自身の生活を守るため、片づける余裕がなかった。そこには飛行機の残骸と乗組員の手や足がころがっていた。胴体は人としての形がなくなり、皮だけが残っていた。今はネズミの死体一匹でもギョッとしますが、当時は見慣れてしまい怖くはなかった。

子どもたちは付近に落ちていた棒きれで転がっている腕や足をつつき『金髪だ』とか『絹の靴下だ』と脱がせてみたり、『マニキュアしてる』

い死んでもしかたがないと思っていた。自分が優秀で正しいと思うあまり、自分がほんとうはなにをしているのか、分からなくなっていた。もしかしたら、アウシュビッツで罪をおかした人びとは、みんなどこにでもいる、ふつうの人たちだったのではないだろうか？ 私たちと同じように…

アウシュビッツはほんとうに終わったのだろうか？

ガス室は、ほんとうに消えたのだろうか？

120センチの棒は、もうないのだろうか？

私たちの心の中に、アウシュビッツは、ほんとうにないのだろうか？

展示物もあった「120センチの棒」というのは、身長を測るための基準とされた横棒である。その高さに満たない子ども達にはガス室が、通れなかった者たちには強制労働とやがて来る過労死や病死が待っていた。この大虐殺は単なる歴史的事件で終わらせてはならないと思う。条件さえ整えば、再び起こり得るのではないだろうか。私には、館の展示はこの視点にあるような印象を受けた。

等と言って観察して遊んでいた。

しばらくしてから死体は集められ、土に埋められた。後に死体は12人ほどの人数だったと聞いた。子ども心にも『敵』等とは思わず、憎しみの感情などなかった。

同級生の父親が近所の寄り合いで『そろそろ日本は負けのよ』等とひとこと言ったばかりに憲兵隊に連行されひどい目にあったという噂が流れ、人は皆、戦争の行方について、良いも悪いも口をつぐみ、本当のところは何を願いどう思っているのかは分らなかった。ただ、死ぬのが恐くて兵隊になりたいとは思わず、何しろ戦争が早く終われば良いと思っていた。

姉二人はシチズンの工場に勤めていたが戦争中は軍需工場となり、朝から晩まで武器を作らされ、二人とも20代前半で亡くなった。

長男である兄は通信兵として南京へ行った。戦闘地域の最前線へは行かなかったが、一緒に行った人に聞いた話では、機銃掃射にあたり、かかとを負傷したとの事だった。

戦争が終わり、兵士として戦地に赴いた人たちは次々と帰ってきた。兄も必ず帰ってくるものと思い『いつ帰ってくるのかなあ』と心待ちにし、生きて再会出来ることを信じて疑わなかった。が、終戦後の昭和22年頃のある日、自宅に役場の小使いさんが訪ねてきた。そして、封筒に入れられた通知書を『お気の毒様です・・・』と持ってきた。

封筒には本人の筆跡で名前が表書きされ、中には爪と髪の毛が入っているだけだった。

その日、姉から家族ひとりひとりに手紙が一通ずつ手渡された。兄が戦地へと向かう列車に乗り込む直前に『自分に何かあったら机の中を見るように』と、妹に託したものだ。中には『しっかりがんばれ』というようなことが書いてあった。（次号につづく）

ヒトラーが政権を取る前に、「彼の言っていることは危険だ」と何等かの行動をとる人がたくさんいたなら、こんなことは起こらなかつたかも知れない。しかし、多くの人は歴史の流れに無関心だった。これは、今の日本の多くの場合も変わらないのではないかと。

（博物館の詳細は、インターネットなどで紹介されています）

事務局便

憲法9条を守り
憲法改悪を阻止しよう
と、いつでも、どこでも、誰にでも声を合言葉に運動をしている大宮平和の会と一緒に、福島のアウシュビッツ平和記念館見学ツアーに参加した。

会長の小野瀬貫さん、途中、途中の「サブ」観光でバスが止まると、その観光客地元に「憲法」のことで話しかける。そしてその感想を車内マイクで我々に報告する。

合言葉を見聞きした。すこい！（ま）